

Title	藤原基経と詩人たち
Author(s)	滝川, 幸司
Citation	語文, 84-85, p. 25-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69055
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

藤原基経と詩人たち

はじめに

経・時平・実頼らが詩文を制作した実態、詩作の場を提供した事 視されていることの証左でもある。 安朝漢詩文の世界は幅広い人々の参加によって形作られていたの 実を考証し、「上層貴族も詩の制作に携わっていたのであり、平 である」と述べる。これは、漢詩文が摂関家嫡流においても重要 後藤昭雄は、藤原北家嫡流、所謂摂関家の、良房・良相・基

い。しかし、当時の詩文集を閲するに、基経は自邸で多くの文事(②) 場について考察し、基経と詩人たちの関係について検討を行う。 を開いている。本稿では、後藤の驥尾に付して、基経が主催した その詩作が「他律的詠作ではなく」「詠懐の表現手段」であった ことを指摘するものの、場の提供者としての側面には触れていな その中で藤原基経については、島田忠臣との「唱酬」の存在、

> 滝 Ш 幸 三

○貞観十六年正月二十二日 東斎にて東風粧梅の詩を賦せしむ 資料に見える基経邸での文事を時代順に掲出し、概観する。 (『菅家文草』巻一・67「早春陪右丞相東斎同賦東風粧梅各分

字探得迎字」、68「書斎雨日独対梅花」)

れば基経邸詩会はその後朝開催なので、期日は貞観十六年正月二 おり(『日本三代実録』同日条。但し詩題明記されず)、自注によ 僅かな期間である。貞観十六年の内宴は正月二十一日に開かれて 九日任民部少輔(『公卿補任』)で、兵部少輔時代は貞観十六年の が参考になる。道真は貞観十六正月十五日任兵部少輔、二月二十 を賦せしむ」という自注、及び結句「兵部侍郎すら興猶ほ催す」 内宴の後朝、右丞相詩客五六人を招き、東風梅を粧ふといふこと 68詩の「今年の内宴勅有りて、春雪早梅に映ずといふことを賦す。 67詩が基経邸詩会での作である。この詩の成立年次については、

十二日となる。

○元慶七年春(か) 客亭にて、道真賦詩

デン 『菅家文草』巻二・Ⅲ「春日於相国客亭見鷗鳥戯前池有感賦

○元慶八年(か) 東廊にて孝経を講じ畢る。竟宴賦詩

失而事其上」)(『菅家文草』巻二・46「相国東廊講孝経畢各分一字得忠順弗

孝経講書終了後詩会が開かれたらしい。の排列から元慶八年頃と考えられる。詩題によれば、基経邸でのが詩題注に「八年十二月廿五日」とあることなど『菅家文草』

○仁和元年二月二十五日 文亭にて初めて世説新書聊命春酒同賦○仁和元年二月二十五日 文亭にて初めて世説新語講書、賦詩

なおこの講書については、次の記録も参考にすべきである。「相府」は太政大臣藤原基経。これも講書に関わる詩会である。「称洗杏壇花応教」)

えられる。講師は藤原佐世である。 ここに記される講書が、『菅家文草』に見える世説講書だと考 云々〈已上清慎公御記〉。 講ずるを聴きて、同じく花気酒中に新しといふことを賦すと る耳。作文有り。題に云はく、春日左相府閤亭に於て世説を 設くと称す。後生朝臣は、佐世朝臣の孫也。堀川院始めて読 文章生藤雅材、学生同公方、同如丘、小野時遇等也。巳の剋 まるる日、二月廿五日なりと云々。自然の感、尤も此の時有 経)、博士右大弁佐世朝臣に読ましむる也。世堀川院に東廊 始めて読ましむ。講筵に預る者云々。祖父堀川太政殿下(基 大内記後生朝臣を為し、始めて世説を読ましむ。尚復四人、 御報に云はく、天曆十一年二月廿五日、清慎公、今日博士に と云々。実否を聞かんが為に、右府(実資)辺に案内せしむ。 読経の次、諸道論義を召す。其の日紀伝・医道同じく参候す …此の道成朝臣、伝へ聞く、故清慎公(実頼)天暦十一年御 (『左経記』長元八年五月三日)

〇仁和二年 東閤にて、道真の餞宴

〇仁和三年頃(か) 東庭の小池の紫藤が初めて花を開く。置酒、讃岐守(『日本三代実録』)。その赴任に際しての餞別宴である。「相国」は太政大臣藤原基経。道真は仁和二年正月十六日に任「相国」は太政大臣藤原基経。道真は仁和二年正月十六日に任

(『田氏家集』巻下・፡፡31「大相府東庭貯水成小池小池種一詩会

紫藤

至於今春始発花房酌於花下翫以賦之応教」)

を終えて帰京したであろうから、これはその頃の作か。る。忠臣は元慶七年正月に美濃介に任じられ、仁和三年には任期美濃大雪以詩記之」、221「府城雪後作」と美濃での作が排列され「大相府」は太政大臣藤原基経。この詩の前に222「元慶七年冬

○年次未詳 基経邸東閤に小侯が孝経を学ぶのを聴いて、賦詩

弟が学ぶ様子を詩に賦したのだろうか。(=歯が抜け替わる頃の子供)であるため詳細は不明だが、基経の子の詩序、末尾を欠く。「小侯」は基経の子弟をいう。「齠齔の年」の詩を、末尾を欠く。「小侯」は基経の子弟をいう。「齠齔の年」紀長谷雄の活躍時期からして「相国」は藤原基経であろう。こ

これらの存在は、基経邸でかなりの文事が行われていたことをと思われる。資料からも道真以外の参加は明らかである。多いが、『菅家文草』という恵まれた資料が残存することによる以上、基経邸文事の頻繁な開催が知られる。道真に関わる例が

=

証すであろう。

賢人を呼び、謀議に参与させた故事である。『菅家文草』『田氏家踏まえる。すなわち、宰相となった公孫弘が、「東閤」を開いて既に大系注などに指摘があるように、「東閤」は公孫弘の故事を前掲資料中に、基経邸の「東閤」で行われた文事が見えたが、

集』には、他にも「東閤」における文事が散見するが、多くは基

○東閤孝経講書、竟宮

経邸文事と理解してよかろう。

「東閤孝経竟宴、進士母に事ふる詩あり」との自注が存する。竟

自注に見える孝経竟宴はさらに遡る時期となる。 自注に見える孝経竟宴はさらに遡る時期となる。 と一段、長春の死は元慶四年八月三十日(『日本三代実録』)、阿満の死と の夢は「夢阿満」(『菅家文草』巻二・川)に詠まれるが、排列 との夢は「夢阿満」(『菅家文草』巻二・川)に詠まれるが、排列 との夢は「夢阿満」(『菅家文草』巻二・川)に詠まれるが、排列 との夢は「夢阿満」(『菅家文草』巻二・川)に詠まれるが、排列 との夢は「夢阿満」(『菅家文草』巻二・川)に詠まれるが、排列 との夢は「夢阿満」(『菅家文草』巻二・川)に詠まれるが、排列 との夢は「夢阿満」(『菅家文草』巻二・川)に詠まれるが、排列 といて思いであろう。孝経講書は、基経邸

○東閤にて詩会(?)

刺史同賦親字〈古調十四韻〉」)(『菅家文草』巻五・糿「左金吾相公於宣風坊臨水亭餞別奥州

「左金吾相公」(左衛門督)は藤原時平で、寛平四年二月二十二

はり時平の父基経の東閤と考えるべきであろう。前掲の世説講書独り行く身」とあり、「東閤」で時平は佐世と会ったという。やある。詩中に時平の言葉として「東閤昔年相遇ひし意、東山今日任』)。この詩もその間の成立となる。「奥州刺史」は藤原佐世で日任。翌五年二月十六日に任中納言で離任したらしい(『公卿補日任。翌五年二月十六日に任中納言で離任したらしい(『公卿補

繁に開かれた詩会で同席した可能性もある。 において佐世は講師であった。時平もそうした講書、 あるいは頻

○寛平二年春(か)

であるから、間にある⑭詩は、寛平二年春の作と考えられる。 が寛平二年五月十六日の橘広相の死(『日本紀略』)に際しての作 成篇陪寛平二年内宴応制作〉」が寛平二年春の作、13「傷左尚書」 のは、桜に忠臣自身を喩えていようか。なお、邛「春風歌〈八韻 考えられる。なお自注に「祇に東閣に陪すること三十年」と記す 詠むことからも、この詩会は東閤、すなわち基経邸で開かれたと う。尾聯に「東閣に年を経て老樹と為る」と東閣(東閤)の桜を 以上が、前節にあげた文事に付け加えられるものである。(タ) 春字」との注から探韻と推測されるので、詩会での作であろ (『田氏家集』巻下・49「賦雨中桜花〈春字〉」)

脈』)で基経の侍読とされる(『二中歴』巻二・摂関侍読)。基経 原佐世、島田忠臣、藤進士(未詳)、時平を含め基経の子息たち が確認できたが、注目すべきは、藤原佐世と島田忠臣であろう。 だろうか。参加する詩人及びその詩の内容から考察を加える。 事を開催していたが、このような行為にはいかなる意味があるの 二節に渉って概観したように、基経は積極的に詩人を集めて文 基経邸文事に参集した詩人としては、菅原道真、紀長谷雄、藤 藤原佐世は、 既に指摘があるように、「藤氏儒士始」(『尊卑分紀)

> の近習であった。なお、基経薨去後陸奥守に左遷されており、こ(ミン) (ユ) られ、阿衡紛議において橘広相追い落としに一役買うなど、基経 の人事では、讃岐守へ転出した道真の後任として式部少輔に任じ の家司であったともいう(『江談抄』巻一・3)。また、仁和二年

の点からも基経との近しい関係が知られる。

文馬有感自題〈于時赴任美濃教令騎去〉」)。基経と忠臣の関係に 年冬大相国以拙詩草五百余篇始屛風十帖仍題長句謹以謝上」)。な た、基経は忠臣に採詩を命じたこともある(同巻中・88「元慶五 いい、「主」と呼ぶこともある(同巻中・101「元慶七年春大相賜 私を蒙る」(『田氏家集』巻中・74「秋日遊南都諸寺」自注)とも 桜花」自注は、それを顕著に示すであろう。「余多く大相国の恩 お、忠臣の弟良臣は基経の近習である(『菅家文草』巻二・93 ついては金原理の考察もあり、後藤がいうように唱和もある。 島田忠臣は、古くから基経に近侍したと思しい。前掲「賦雨中 ま

奉和兵部侍郎哭舍弟大夫之作押韻」)。

料量紫茸花下尽 料量す紫茸花の下に尽くるを

家香更作国香飛 家香は更に国香と作りて飛ばん

藤至於今春始発花房酌於花下翫以賦之応教」) (『田氏家集』巻下・ヨコa「大相府東庭貯水成小池小池種一

久来意を用ゐて芳蔭に依る

不向人間趁百花 久来用意依芳蔭 人間に向て百花を趁はず

a詩では、藤という藤原氏の香が「国香」(=国を代表する香)

忠臣には基経邸詩会での作も残る。詩の尾聯をあげる。 同前131 b) 紫

を詠む。忠臣の姿勢は、基経の面前だからというわけではない。遊南都諸寺」は、基経と同座していないにも拘らず、その「恩」邸での詩会だから当然の表現だとの見解もあろうが、前掲「秋日しはしないと、藤原氏への忠誠と庇護下にいる自分を詠む。基経となると称揚し、b詩では、その藤の「蔭」に寄り、他の花を探

忠臣は基経の庇護を願う立場にいたのである。

このように忠臣と基経は、近習と主という関係で一貫している。

詩の表現は忠臣に通じる面がある。貞観十六年正月二十二日の詩付ける資料はない。但し、主従関係にあったとはいい難い道真も、あろうか。しかし、佐世にしろ、忠臣にしろ、道真の父是善門下あろうか。しかし、佐世にしろ、忠臣にしろ、道真の父是善門下あろうか。しかし、佐世にしろ、忠臣にしろ、道真の父是善門下あろうか。近真はとの主従関係はなかったようである。道真世や忠臣のような基経との主従関係はなかったようである。道真は、佐基経邸文事で多くの資料を残す菅原道真はどうか。道真は、佐

讃えるのである。

春日於相国客亭見鷗鳥戯前池有感賦詩

繁華太早千般色 繁華太だ早し千般の色

会では、次のように詩を結んでいる。

号令猶閑五日程 号令猶ほ閑なり五日の程

好是銀塩多結藥

『菅家文草』巻一・67「早春陪右丞相東斎同賦東風粧梅各分応縁丞相欲和羹 - 応に丞相の羹を和せんとするに縁るべし

好し是れ銀塩多く薬を結ぶ

一字探得迎字」)

程」は静かだという。「儒者太平の瑞応を論ずるに、…五日に一多くの花が早くも様々な色に咲き、「号令」(=風)が「五日の

ていることになる。天下太平の光景と基経の丞相としての立場をと「梅」を用いる、すなわち天子の良き輔佐であるためだと詠じただと詠むのだが、「和美」は「若し和羹を作らば、爾は惟れ塩らだと詠むのだが、「和美」は「若し和羹を謂えようとしているかが花を結ぶのは、「丞相」(=基経)が羮を謂えようとしているかが花を結ぶのは、「丞相」(=基経)が羮を謂えようとしているかが花を結ぶのは、「丞相」(=基経)が羮を謂えようとしているかが花を結ぶのは、「丞相」(=基経)が羮を問えようとしているかが花を結ぶのは、「永衛」 と表現したので風が五日に一度吹き枝を鳴らさずと皆言ふ」(『論衡』是応)に基づき、たび風ふき、風条を鳴らさずと皆言ふ」(『論衡』是応)に基づき、たび風ふき、風条を鳴らさずと皆言ふ」(『論衡』是応)に基づき、

当時未謂浮沈定 当時未だ謂はず浮沈定まれりと将欲霜翅不同塵 将に霜翅の塵に同じくせざらんとせんとす非与紫鱗争楽水 紫鱗と争ひて水を楽しむに非ず臭道沙鷗素性馴 道ふ莫かれ沙鷗素より性馴れたりと人知鳥意鳥知人 人は鳥の意を知り鳥は人を知る

遂生何必入懐仁 遂生何ぞ必しも入りて仁に懐かん 棲息若容三四日 棲息若し三四日を容さば 数処唯無去就頻 数処唯だ無きのみ去就頻りなること

道真は所謂「詩人無用論」に囲まれ中傷されていた。道真にとっ一元慶七年春頃基経客亭での作だが、先述したように、この時期

んだ詩だが、鷗には道真自身が重ねられていよう。ては心安からざる状況である。この詩、池で戯れる鷗に感じて詠

う。ここも基経邸に来た道真の心情を重ねる。 首聯で、鷗は人の心を知ると詠むのは、鷗がこの池で戯れるのも、邸の主人基経の心を知っているからであるというのであろう。二句目に、元来人に馴れるのではないと詠むのは、鷗がこの池で戯れのも、元来人に馴れるのではないと詠むのは、鷗がこの池で戯れるのも、邸の主人基経の心を知ると詠むのは、『列子』に記される著首聯で、鷗は人の心を知ると詠むのは、『列子』に記される著

以下、鷗について、頷聯では、池の水を楽しむことを魚と争っない状況を重ねているのである。

花色人顔酔一般晚来春酒終無算

花色人顔酔ふこと一般

晩来春酒終に算無し

豈教五出且銷残

豈に五出をして且た銷残せしめんや

不安を基経に訴えているといえよう。「詩人無用論」に囲まれ中逃れること、我が身の不安定さが主たる内容であり、そのようなこのように鷗に我が身を重ねて詠じているのだが、俗世間から

以上の詩によれば、やはり道真も忠臣と同様に基経を讃美して

世説講書における道真の詩も存する。求めていると理解できよう。

傷を受けていた頃の詩作であることを考慮すれば、基経に庇護を

唯有十旬相長養 唯だ十旬相長養すること有るとも 愛理応知樹不寒 愛理応に知るべし樹寒らざるを 切能欲効雲先潤 功能効さんとして雲先づ潤ふ 切能欲効雲先潤 功能効さんとして雲先づ潤ふ 学者誰家異杏壇 学者誰が家ぞ杏壇を異にせん

のである」という見解に従うべきであろう。 との作者自身の気持ちをそこに表現しようとしたからに違いないい働きを作者が強調しているのは、勿論、一方で、春雨を当日のい働きを作者が強調しているのは、勿論、一方で、春雨を当日のからに違いないのである。より一段の「雨露之恩」を期待したい酔って花も人も同じく赤くなっている様子で結ぶ。この詩につい酔って花も人も同じく赤くなっている様子で結ぶ。この詩についいのである」という見解に従うべきであろう。

いる。そして、これもまた忠臣同様、 基経の面前だから称揚した

というわけではないようである。 宮門雪映春遊後 宮門雪は映ず春遊の後

相府風粧夜飲来 〈今年内宴有勅、 相府風は粧ふ夜飲来 賦春雪映早梅。内宴後朝、 右丞相招詩客

五六人、賦東風粧梅。余雖不才、侍此両宴。故云〉 内宴後朝、右丞相詩客五六人を招きて、東風梅を粧ふと いふことを賦す。余不才と雖も、此の両宴に侍る。故に 〈今年内宴勅有りて、春雪早梅に映ずといふことを賦す。 (『菅家文草』巻一・68「書斎雨日独対梅花」)

宮中内宴と基経詩会を対にして詠んでいるが、この詩は、詩題

詠でありながら、内宴と基経邸詩会に参加したことを同列に詠む 会を対にし「此の両宴に侍」ったことを詠じているのである。独 を名誉に感じているからであろう。 のは、内宴に比すべき場として基経邸詩会を高く位置付け、参加 に明らかなように独詠である。それにも拘らず、内宴と基経邸詩

また基経に庇護を願う立場にいたと考えられる。 基経を「主」と詠ずる忠臣程ではないが、道真も基経を讃美し、

下にいるという意識で詩を賦しているといえよう。 (3) しなくとも基経への恩を詠む詩もあり、詩人たちは、 は基経に庇護を求める詩がその大半である。しかも、基経と同座 基経邸文事での作品を概観したが、基経を讃美する詩、あるい 基経の庇護

詩人という視点からさらに考察を加える。 けなら、もっと早くから文事が見えてもよかろう。大臣就任以後 摘があるが、資料的な制約があるにしても、詩文に対する興味だ 臣就任以後である。基経自身の詩才については後藤前掲論文に指 に頻繁に見出せるのは、何か理由が存すると考えられる。大臣と になったのは、貞観十六年が最初であったが、これは基経の右大 ところで、前掲の資料を見る限り、基経邸文事が開かれるよう

…詩人を招引し、杯を接へ席を促す」とあって、必ずしも大臣時

右大臣藤原三守は薨伝に「三守早く大学に入り、五経を受習す。

代とはいえないものの、詩人を招いたことが見える。

基経の父良房邸では、次のような文事が開かれている。 ○仁寿元年三月十日 右大臣良房東都第にて仁明天皇を偲び賦

○貞観六年二月二十五日 清和天皇、太政大臣良房東京染殿行 幸、桜を観る。詩宴(『日本三代実録』貞観六年)

詩歌(『日本文徳実録』仁寿元年)

○貞観八年閏三月一日 清和天皇、太政大臣良房染殿第へ行幸、 桜を観る。詩宴(『日本三代実録』貞観八年)

私的な文事とはいい難い。殊に貞観六・八年の例は清和天皇の行 ての立場であるが、基経と比較すれば、恒常的に詩会を開いたと いうことはない。また、いずれも天皇と関わるもので、必ずしも これらは既に後藤昭雄に指摘がある。いずれも場の提供者とし

ある。つまり現存資料上良房主催の詩会は、一例しかないのでである。つまり現存資料上良房主催の詩会は、一例しかないので幸詩宴であり、良房が場を提供しているとはいえ、主催者は清和

これらは『田氏家集』に見えるが、忠臣だけではなく他の詩人も で史記が講書され、その竟宴が行われたことを示す資料である。 直廬読史記竟。詠史得高祖、応教」の作があるが、貞観三~六年 勒徴興升膺〉」(『田氏家集』巻上・22)は、美作国が白鹿を献上 は見出し得ない詩会も開いている。 参集していたことは確実である。このような詩会・講書は基経も る。他にも、同じく『田氏家集』(巻上・37)に「於右丞相省中 の右大臣は良相である。すなわち、貞観四年の良相邸での宴とな 十七日に「美作国白鹿を献ず」(『日本三代実録』)と見え、 した際に詠まれた忠臣の詩であるが、詩題に「晩秋」、詩中に る。「晩秋陪右丞相開府賜飲。于時美作献白鹿。仍命賦四韻 大学に遊ぶ」(同前)と、大学出身であるのは、三守と同様であ 条)と見え、大学生に援助をしている。「弱冠に及びて、始めて 生を択び、時に綿絹を賜ふ」(『日本三代実録』貞観九年十月十日 好んだらしい。良相は薨伝に「文学の士を愛好し、大学中貧寒の は頻繁に詩会を開いている。島田忠臣との関係も知られ、文事を 「秋旻」とあり、秋に白鹿が献上された記録は、貞観四年九月二 間の作と推測され、その間の右大臣は良相である。 注目したいの 良相は大学寮出身ということもあってか、基経に は 藤原良相である。後藤に指摘があるが、 良相の直慮 同年

賦冬日可愛

冬日愛すべしといふことを賦し得たり。請ふ格律を共にし文各詩篇有り。故に具に名姓を録せざるなり。十一月中旬の試、文藻日に新たなり。亦預りて学士の列に在り。自余の数子、以でか旃に加へん。相公の両子、年皆成童なり。風度清格、以て英才を延く。枝中丞をして毎旬試みるに文章筆札を以て以て英才を延く。枝中丞をして毎旬試みるに文章筆札を以て以て英才を延く。枝中丞をして毎旬試みるに文章筆札を以て以て英才を延く。枝中丞をして毎旬試みるに文章筆札を以てりて、真観の初、大階平にして、寰海静なり。右丞相客館を開き、貞観の初、大階平にして、寰海静なり。右丞相客館を開き、

を成さんと云ふこと爾り。

(『本朝文粋』巻八・202)

ために開かれたものであった。しかるに良相の旬試は、自分の子を招き、毎旬「枝中丞」(大江音人)に「文章筆札」を試みさせ、を招き、毎旬「枝中丞」(大江音人)に「文章筆札」を試みさせ、を招き、毎旬「枝中丞」(大江音人)に「文章筆札」を試みさせ、を招き、毎旬「枝中丞」(大江音人)に「文章筆札」を試みさせ、この詩序によれば貞観の始、良相が「客館」を開いて「英才」この詩序によれば貞観の始、良相が「客館」を開いて「英才」

どの人物が主催するのであるから、参加する詩人としても研鑽の先に指摘した良相邸詩会や直廬史記竟宴にしても、旬試を行うほこの旬試の存在は、良相主催文事の高い専門性を推測させる。

息を他の詩人と同列に扱っているのである。

検討を続ける。 検討を続ける。 という意識を持ったであろう。もちろん、これを良相と詩人た場という意識を持ったであろう。もちろん、これを良相と強力には をが文芸によって結びつく場であると判断するには慎重でなけれ をが文芸によって結びつく場であると判断するには慎重でなけれ という意識を持ったであろう。もちろん、これを良相と詩人た 場という意識を持ったであろう。もちろん、これを良相と詩人た

五

晩秋陪右丞相開府賜飲。于時美作献白鹿。仍命賦四韻〈同相邸詩会で、島田忠臣は次のような詩を詠んでいる。はない。例えば、貞観四年晩秋、美作国が白鹿を献上した際の良を願う詩が多く見えた。ところが良相邸文事では必ずしもそうで基経邸文事での作品は、基経を讃美する、あるいは基経に庇護

のでは、1975年では

勒徴興升膺

行時練段翻三尺(行く時は練段三尺を翻し度関疑馬吏先興(関を度る疑馬吏先づ興く過隙白駒人自感)隊を過ぐる白駒人自ら感ず

来呈上瑞聖君膺(来呈せる上瑞聖君膺る) 労苦挟輈州境遠(労苦輈を挟み州境遠し) 臥処霜封可数升(臥す処は霜封ずること数升ばかり

である。また、次のような例もある。 (『田氏家集』巻上・22) である。また、次のような例もある。 (『白鹿の様子を練り絹や霜に見立てる。そして尾聯では、道写し、白鹿の様子を練り絹や霜に見立てる。そして尾聯では、道写し、白鹿の様子を練り絹や霜に見立てる。そして尾聯では、道写し、白鹿の様子を練り絹や霜に見立てる。そして尾聯では、道写し、白鹿の様子を練り絹や霜に見立てる。そして尾聯では、道写し、白鹿の様子を練り絹や霜に見立てる。また、次のような例もある。

冬日可愛

島田忠臣

不愛満炉紅火熾 愛でず満炉紅火熾かりなるを林擬春晴鳥欲喧 林は春晴を擬して鳥喧かんとす「憐冬景好当軒 憐れむべし冬景好く軒に当るを「緊軽裘不足言 厚絮軽裘言ふに足らず

光耀多添徳政温 光耀多く添ふ徳政の温かきに生逢聖運垂仁日 生れて聖運仁を垂るる日に逢ひ

何愁綿地白霜繁

何ぞ愁へん綿地白霜繁きを

(『田氏家集』巻上・28)

尾聯では「聖」天子の「仁」「徳政」を称揚するのである。ここ先に注目した旬試での作だが、冬の日光の暖かさを詠じつつ、

でも場の主催者である良相には触れていない。

邸文事は、基経邸文事が基経讃美に傾くのとは異なる場であると 催の宮廷詩宴で詠まれた作品であるといわれても不自然ではない。 この辺りは資料も少ないので判断は難しいが、いずれにしろ良相 旬試とは、 た藤原氏を称揚していたのであった。「冬日可愛」などは天皇主 は異例であるように思う。忠臣自身基経邸文事では、基経を、 嗜好なのかもしれないが、それにしても場の主催者に触れないの ずしもない。この二例はともに忠臣の作である。あるいは忠臣 が、「冬日可愛」は天子を称揚しなければならない主題では、必 兆を主題にするから、天子が称揚されるのも理解できなくはない 者の基経の恩徳が詠まれ称揚されていたのである。 にはやはり留意されよう。少なくとも基経邸文事であれば、主催 る。それが双方ともに場の主催者に触れず、天子の恩徳を詠む点 ここにあげた二首は、ともに良相主催の文事で詠まれた詩であ 宮廷詩宴での詠作を学習する場であったのだろうか。 白鹿献上は瑞 ま

の

の最大の相違はここにあると思うのである。

参集させられたといえるのではないだろうか。良相と基経の文事

小侯に授けしむ」(紀長谷雄「陪相国東閤聴諸小候聚学孝経」)と 子は、いまだ「齠齔の年」ではあったが、「碩学に命じて、此の いう立場であった。ここには子息の待遇の差異が明白に表れてい た。しかし、良相の子が「学士」と同列にいたのに対し、基経の の列に在」らしめていたが、基経の子息も孝経の講書を受けてい ところで、良相は旬試において、自らの子息をも「預りて学士 良相は旬試を受ける学士と同列に子息を扱ったのに対し、基

いえようか。

ても陪席した詩人にしても、基経及びその子息に奉仕するために の孝経講書は基経の子息のために開かれた場であって、講師にし 参集した詩人は講書に陪席していたと推測される。すなわち、 経は子息のために「碩学」を喚び孝経を講書させたのである。 - 陪相国東閣聴諸小侯聚学孝経」という題からすれば、その場に

たと推測されるのである。 びつきを示してもいよう。基経邸文事は、単に好学・好文によっ いた時期に多く見出せるのは、摂関という地位と文事の密接な結 える。良相は大学寮出身であるから文事を開くのも不審ではない て開かれたのではなく、摂関という地位と深く関わるものであっ になってからである。殊に、元慶・仁和という、摂政・ が、基経は違う。詩才はあったが、文事を頻繁に開くのは右大臣 前述したように、基経邸文事は、貞観十六年右大臣時代から見 関白に就

掲した道真詩(8「書斎雨日独対梅花」)で、宮中内宴と基経邸 を頂点に置いた秩序を作り上げることになるであろう。 宮廷詩宴は、天皇を頂点とした場で、その秩序を詩文による称揚 こには、基経を頂点に置く世界が形成されていくことになるので によって維持する機能があるのだが、同様に、基経邸文事も基経(2) はないか。ここで想起されるのが、天皇が行う宮廷詩宴である。 る。 摂関である基経を頂点に置き参加した詩人たちは基経を讃美す また、基経の命に応えて子息への講書などの奉仕を行う。 なお、

る。 詩会が同列に扱われていたことも、これを裏付けるように思われ

いる。出せないことは、基経の創出であったことを示すのではないだろ出せないことは、基経の創出であったことを示すのではないだろとしてこのような文事が人臣最初の摂政である良房にはほぼ見

六

彼らはそれぞれ基経を称揚し、また基経に庇護を願うが、例えば基経から見れば、佐世・忠臣・道真らは同列の存在ではない。とってどのような存在なのであろうか。

じられており、道真を慰めるような言葉を掛けたとはいえ、その詩題)が、前述した通り、道真の後任として式部少輔に佐世が任真に詠じ、道真をいたく感動させている(『菅家文草』巻三・四八年で、近真をいたく感動させている。『菅家文草』巻三・四八年で、道真をいたく感動させている。『で家文草』巻三・四八年ではたとはいえまい。また、道真についても、道真の讃岐赴任忠臣は古くから近侍しているにも拘らず、官界において重要な地忠臣は古くから近侍しているにも拘らず、官界において重要な地忠臣は古くから近侍しているにも拘らず、官界において重要な地忠臣は古くから近侍しているにも拘らず、官界において重要な地忠臣は古くから近ける。

の政権構想に取り込むかは、基経の選択でしかない。定の配慮はあるものの、実際に誰を昇進させるか、あるいは自ら書を行い詩を賦しながら庇護を願うが、基経の側からすれば、一書を行い詩を賦しながら庇護を願うが、基経の側からすれば、一様世は藤氏儒者・家司という立場があるためか、忠臣・道真と

配慮は道真の政治的立場にまでは及ばない。

道真の後任に佐世を選んでいることからも、基経にとっては道道真の後任に佐世を選んでいることからも、基経にといるがもしれない。たとえ讃岐赴任に際し道真を感動させる言葉をあかもしれない。たとえ讃岐赴任に際し道真を感動させる言葉をであるう。藤原克己が「基経は、道真にとくに目をかけていたよしても、いくら庇護を求められても、すべてに応じる必要はないしても、いくら庇護を求められても、すべてに応じる必要はないもであるう。藤原克己が「基経は、道真にとくに目をかけていたよりです」というのも、左にとっては道道真の後任に佐世を選んでいることからも、基経にとっては道道真の後任に佐世を選んでいることからも、基経にとっては道

おわりに

「基経邸文事及び参集する詩人について論じた。基経邸文事の存めの関係についても、その構成原理、主催者の意図など、さらに検えった。そうした関係になくとも、基経に庇護を願う詩人が参集あった。そうした関係になくとも、基経に庇護を願う詩人が参集あった。そうした関係になくとも、基経に庇護を願う詩人が参集あった。そうした関係になくとも、基経に庇護を願う詩人が参集あった。その好文を示すものではあるが、参集する詩人の中心と基経邸文事及び参集する詩人について論じた。基経邸文事の存法を進める必要があろう。

注

- 平成五年、昭和六十三年初出)。(『平安朝文人志』吉川弘文館(1) 後藤昭雄「摂関家の詩人たち」(『平安朝文人志』吉川弘文館
- 公〉」(『江談抄』巻四・29)。 在が知られる。「酔望西山仙賀遠 微臣涙落旧恩衣〈内宴、昭宣(2) 後藤は同論文で基経の詩作は現存しないというが、次の詩の存
- ―平安文学と『世説』其三―」(武蔵野文学2・平成五年三月)。(3) 今浜通隆「仁和元年二月二十五日基経邸読書始について(上)
- 質州外刺史」(『菅家文草』巻二・㎞)への和詩だが、道真詩にい詩草依本韻継和之」(『田氏家集』巻中・㎞)は、道真「喜被遙兼に美濃介であった。忠臣「拝美濃之後、蒙菅侍郎見視喜遙兼賀州行美濃介嶋田朝臣忠臣権行,玄蕃頭事;」とある。忠臣はこれ以前4)『日本三代実録』元慶七年四月条に「廿一日丁巳。…従五位上

- たと考えてよいであろう。 濃介の辞令は同日に届いている。忠臣もこの時美濃介に任じられ 七句に「除書同日到」とあって、道真の任加賀権守と忠臣の任美 う加賀権守兼任は、前述の如く元慶七年正月十一日。忠臣詩の第
- (5) 『漢書』公孫弘伝「数年至」。宰相,封」侯。於」是起,[客館、開]東閣」とあったらしい。なお『芸文類聚』にも引用庭門,|而引,|賓客、以別,|於掾史官属;也」とある。顔師古の依拠し庭門,|而引,|賓客、以別,|於掾史官属;也」とある。顔師古の依拠し庭門,|而引,|賓客、以別,|於掾史官属;也」として見える。なお、閣,以延,賢人、与参,|謀議,」には「東閣」として見える。なお、閣,以延,賢人,「
- (6) 金原理「嶋田忠臣傳考」(『平安朝漢詩文の研究』九州大学出版(6) 金原理「嶋田忠臣傳考」(『平安朝漢詩文の研究』九州大学出版
- 和五十四年初出)参照。 佐世」(『平安朝漢文学論考 補訂版』勉誠出版・平成十七年、昭(7) 大系注は藤原滋実を当てるが誤りであること、後藤昭雄「藤原
- 叙詩情怨一篇呈菅十一著作郎長句二首偶然見詶更依本韻重答以訊和之次、聊述..本情。…〉」(『菅家文草』巻二・119(2)「余近得..白氏之体。余読..此二句、感..上句之不..欺、兼下文之多n詐。得.玲瑰。三条印綬依、恩佩、九首詩篇奉..勅裁〈来章曰、蒼蠅旧潛(9) 同時期、他の「東閤」が見える。「東閤含将真咳唾、北溟売与

助」)に見える「東閤」も公孫弘の故事に基づくが、この詩がII8 謝」)に見える「東閤」も公孫弘の故事に基づくが、この詩がII8 謝」)に見える「東閤」も公孫弘の故事に基づくが、この詩がII8 が知られる。この詩序は冒頭に「涒灘」とあるが、柿村重松「本雄文社でとからも、III(2)の「東閤」は基経邸の書斎を意味る。「卿相門前歌、白雪、」に対応する。従ってこの「連館裏失、驪珠、卿相門前歌、白雪、」に対応する。従ってこの「連門」に対応し、さらに惟肖のこの聯は、道真「詩情怨」の「鴻聯は、自注に引用する惟肖の詩の「蒼蠅旧讃元台弁、白体新詩大職館裏失、驪珠、卿相門前歌、白雪、」に対応する。従ってこの「連門を指すことからも、III(2)の「東閤」は基経邸の書斎を意味するものではないと思われる。また、都良香「陪左丞相東阁聴源するものではないと思われる。また、都良香「陪左丞相東阁聴源」とあるが、柿村重松「本が知られる。この詩序は冒頭に「涒灘」とあるが、柿村重松「本雄和文社である。そもそも基経は左大臣になっていない。

- (10) 後藤「藤原佐世」(前掲)。
- 店・昭和六十三年、昭和三十七年初出)。 (11) 彌永貞三「仁和二年の内宴」(『日本古代の政治と資料』高科書
- (12) 『円珍和尚伝』、後藤「藤原佐世」(前掲)。
- ことには疑問を感ずる。
 る」と評するが、「主人とその近習という関係」を低く見すぎるとその近習という関係を越えた人間的な暖かいつながりを感ずとをの近習という関係を越えた人間的な暖かいつながりを感ず(1)
 金原「嶋田忠臣傳考」(前掲)。なお金原は二人の関係を「主人
- (11) 後藤「摂関家の詩人たち」(前掲)。
- 之至者、百数而不」止。其父曰、吾聞,鷗鳥皆從」汝好。取来我玩!(16)「列子曰、海上之人好」鷗者、毎旦之!,海上、従,鷗鳥,遊。鷗鳥昭和四十八年初出)。

之。明日之海、鷗鳥舞而不」下」(『芸文類聚』鷗)。なお『列子』

では「鷗」を「温」に作る。

(17) 今浜通隆前掲論文。

- と近似する。 本文中に述べた詩人の意識も、こうした唐詩の例と考えられる。本文中に述べた詩人の意識も、こうした唐詩の例店詩には同様な例が他にも見え、東閤は庇護を願う場でもあった店詩には同様な例が他にも見え、東閤は庇護を願う場でもあったいと詠む。東閤に行けば、不遇から脱せるという前提があろう。が、自らの不遇をいうのに「孫弘閣」(=東閤)がまだ開かれなが、自らの不遇をいうのに「孫弘閣」(=東閤)がまだ開かれなが、自らの不遇をいうのに「孫弘閣、孫弘閣未」開」とある
- に奉る書」(アジア遊学50・平成十五年四月)に指摘がある。(9) 薨伝のこの記述については、後藤昭雄「本朝文粋抄⑧ 右大臣
- (20) 後藤「摂関家の詩人たち」(前掲)。
- 六年となる。 立春」が貞観七年の作なので、37詩の制作年次は貞観三年~貞観 三年九月九日重陽宴での作(『日本三代実録』)で、40「七年歳旦(21) この前に排列される36「九日侍宴賦菊暖花未開応制」が、貞観
- 間。なお後藤「摂関家の詩人たち」(前掲)参照。(2)「枝中丞」=大江音人であるから、貞観元年~貞観四年までの
- 穏和な性格を喩える。(33) 「冬日可愛」は、『春秋左氏伝』文公七年によるが、晉の趙衰の
- (3) 宮廷詩宴と同じ構造を持つとはいっても、基経が自分を天皇に三月)などを参照されたい。 平成八年七月)、「宇多朝の文壇」(奈良大学紀要30・平成十四年(44) 拙稿「「風月」考―公宴詩会との関わりにおいて―」(語文66・
- 主の部分に自分を置き換えたものを創出するねらいがあったかとを開いた意図を、天皇が主催する内宴・重陽宴と同じ構造で、君想の成立と挫折』東京大学出版会・平成十七年)は、基経が詩宴菅原道真の構想」(『平安朝の漢詩と「法」 文人貴族の貴族制構比したとまではいえないであろう。桑原朝子「詩人による政治―

いう。この指摘自体は首肯し得るが、基経邸での道真の詩を取りいう。この指摘自体は首肯し得るが、基経の「意図に沿う詩を高に過ぎない子を見てくれば、基経に対して輔佐にしか「過ぎない」と論じることから推測するに、桑原は、基経が自らを天皇に比したと考えているのだろう。しかし、基経にはそのような意図はなかったと理解すべきではないだろうか。桑原は、遠の解釈も当然可能であり、本文中に概観したように基経が自るとの解釈も当然可能であり、本文中に概観したように基経が自らを天皇に比したと考えているのだろう。しかし、基経にはそのような意図はなかったと理解すべきではないだろうか。桑原は、道度が、基経自身を天子の優れた補佐として位置付けていることは、真が、基経日身を天子の優れた補佐として位置付けていることは、真が、基経日身を天子の優れた補佐として位置付けていることは、真が、基経日のであるうか。

(26) なお藤原克己は、この内宴について「その内宴は道真に対する(27) 柔原朝子は前掲論文注邸で「詩人としての強い自覚を持つ者の中に、摂関家に取り入ることで自らの昇進を図った者は存在しな中に、摂関家に取り入ることで自らの昇進を図った者は存在しな中に、摂関家に取り入ることで自らの昇進を図った者は存在しな中に、摂関家に取り入ることで自らの昇進を図った者は存在しな中に、摂関家に取り入ることで自らの昇進を図った者は存在しない」といい、忠臣・良臣兄弟が「藤原基経と相当近い関係にあっい」といい、忠臣・良臣兄弟が「藤原基経と相当近い関係にあっい」といい、忠臣・良臣兄弟が「藤原基経と相当近い関係にあっい」といい、忠臣・良臣兄弟が「藤原基経と相当近い関係にあっい」といい、忠臣・良臣兄弟が「藤原基経と相当近い関係にあったが、共に官位は一生あまり上がっておらず、人的繋がりを利用たが、共に官位は一生あまり上がっておらず、人的繋がりを利用たが、共に官位は一生あまり上がっておらず、人的繋がりを利用して官人としての利益を得ることをしていない」という。忠臣兄弟が「藤原基経の立場と庇護を願う詩人と論じるのである。しかしている場別家を兼ねている。

たちの立場とを混同している。官位が一生上がらなかったのは、

必ず「官人としての利益」が得られるわけでもなかろう。にその意志がなかったからである。「人的繋がりを利用」すれば、忠臣らが「人的繋がりを利用しなかった」からではなく、基経側

藤原「讃岐守時代」(前掲)。

28

—奈良大学文学部助教授—